

本音で繋ぐ明るい未来

各務原市立桜丘中学校二年 高橋 あすみ

「うわっ、メガネババアだ。」

年少の頃だった。一つ年上の男の子達にそんなあだ名をつけられて、私へのいじめが始まった。私は、自分が大嫌いになった。特に、自分は何も悪くないのに「人と違うから」というだけでいじめの原因となったその眼鏡を一刻も早くはずしたかった。

これが私の人生初のいじめの経験と、その時感じたことだ。幼い頃にそんな経験をしたからか、小学校に入ってから私は、何でもニコニコ笑って、無理矢理周りの子と話を合わせる子になってしまった。何度か眼鏡について、からかわれる事はあったが、その時はいつも

「ちょっとやめてよ〜。」

と明るく否定するくらいだった。親に心配をかけたくないし、何よりからかわれた程度で真剣に落ち込むと、その方がもっとからかわれると思った。だからこそ、明るく合わせてきたし、相手の投げかけにも必ず相づちを打ってきた。

「ね、アイツ、キモくない？」

そう話しかけられたことがあった。指を差している方向には、特別支援学級の子がいた。

「え、あ、うん。そうだね。」

いつもの癖で、何も考えずそう答えた。それからしばらくして、学級内でその子に対するいじめが始まった。特に多かったのは「菌回し」というもので、私も「〇〇さんの菌」として菌を回された時は、ずっと持っているのも嫌だと思い、他の人へまた回してしまっていた。その子は、何も悪くないと思っていながらも、他の人の悪口をきいていると、その子がだんだん汚い存在に思えてきて、自然と私自身もその子をさけるようになっていた。そんな自分が嫌だった。何度か道徳で「いじめはいけません。」という学習をして心を改めようとしたが、幼い頃に植えつけられてしまった性格は深くまで根を張っていて、そう簡単に変えられるわけがなかった。いつも自分に負けては、いじめる側へと回っていた。

しかし、ある日、私が一步踏み出せるきっかけとなる出来事が起こった。いつもの帰り道、友達と道徳の

授業の話をしていたら、友達がポツリとつぶやいた。「でも私、あの子は何も悪くないと思うんだけどな……。」

「え、あ、うちも！同じこと思ってた！！」

「やっぱりそうだよね！？周りの子の見方が間違っているだけだよねー！」

無意識に、初めて「本心からの」共感の声を出していた。なんだ、案外近くに、同じ事を考えている人はいたのだ。そう思った瞬間とっても安心したし、少し希望が見えた気がした。もしかしたら、私と同じ人がもっといるのかもしれないと思って、それからは、菌を回されても私とその友達だけはそれ以上回さなかった。その時その特別支援学級の子はどんな事を思ったか知らないが、私も同じような体験をしたことがある。

中一の時、眼鏡についてではないが、集団で私を嫌な目で見えてきて、今までで一番私の心に突き刺さることがあった。今まで結構仲の良かった子にも無視されて、裏切られたととても悲しんでいた時、私を呼び出して「私達は影で応援してるから、負けないで。」と言ってくれた女子二人がいた。とても心強かった。小さな行動でこんなにも勇気もらえるんだと思った。それから私に対するいじめは続いたが、支えてくれている人がいると思えばあまり怖くなかった。

こんな体験があり、私は一人でもいいから「一人じゃないよ。」と手を差し伸べてくれる人がいれば、それは相手にとって、とても心強い支えになることを学んだ。もしかしたら、みんなが全員「いじめたい」と思っているわけではないかもしれない。可能性はゼロじゃない。その可能性を怖がって行動に移せていないのが今の学生であり、かつての自分である。それは、とてももったいないことだと私は思う。救えるかもしれない人を見捨てているからだ。

「いじめ」は、人権問題の中でもとても大きな問題だと私は思っている。私は、それで人権を侵害されたこともあるし、したこともある。いじめる側の気持ちも、いじめられる側の気持ちも、どちらもよくわかってきた。今、全国、全世界では、たくさんのいじめが発生しているだろう。それをゼロにしろと言われてれば、それは難しい。しかし、一度本音を口に出してみれば、それは案外、他の人にも伝わって、繋がっていくかもしれない。人権侵害のない明るい未来をつくっていくためには、そんな小さな一歩がとっても大切なのだ。